

2021年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書
(協力活動 / 調査・研究)

提出日: 2022年12月6日
氏名: 宮本春香
プロジェクト名称: ネパール パナウティの女性達に訓練と自立の機会を
実施国: ネパール
実施期間: 2021年12月1日～2022年6月30日

1活動実施内容概要

ネパールの女性達に裁縫の技術を身につけてもらい、彼女たちの雇用創出、自立支援の為にプロジェクトを計画しました。

活動として、まずは受講希望者の募集から始めました。チラシも用意して募集しましたが、口コミで広がり、たくさんの受講希望者から連絡がありました。

希望者に集まってもらい、面接を行い、家庭環境、家族構成、経済状態、学ぶ意欲、についてヒアリングを行いました。その中から10名に訓練に参加してもらうことにしました。10名を2つのグループに分け、1つ目のグループが朝8時から10時まで、2つ目のグループが10時から12時までという体制で始めました。この訓練を半年間行い、識字と裁縫を習得しました。

生理用ナプキンを製作する前に生理についての理解を十分に深めてもらうために生理に関する研修を行ないました。

仕立屋さんに協力してもらい、仕立ての際にお店で出る布の端切れを再利用して、サンプル作成を行いました。

試行錯誤を重ねて、出来上がった製品を首都カトマンズの日本人の方が経営のお店に置いてもらっています。

ネット販売は現在、日本での販売を視野に入れて、輸送方法と販路を構築中です。それに向けて現地でよりよい方法を模索しています。

2活動の結果・成果

就学率が低く、結婚して、子供を産み、家の仕事をして一生を過ごしていた女性たち。十分な教育を受けていないため、識字率も低く、1日中、肉体労働をして安い賃金で家計を支えている女性も多くいます。そんな女性達は今回のプロジェクトを通して、知識と経験を得て、自信をつけ、自立の第一歩となりました。現在でも向上心を持って製品作成に取り組んでくれています。

今回の活動を通して、活動の中心となった、2つの項目は識字率の向上と技術の習得です。文字の読み書きが出来なかった女性達が、今回の訓練を通して、読み書きを覚え、初めは何事においても消極的だったのが、分からないこと(文字の書き方や読み方)を尋ねたりして、自身の向上に積極的に取り組んでいる様子から見ると自信を得たことが分かります。

文字の読み書きが出来るようになると次は裁縫技術の習得でしたが、前段階で学び、習得することの喜びを知った女性達は、裁縫の訓練でも周りの仲間と協調し、分からないことを教え合いながら取り組んでいました。それは学ぶことで自信を得て、互いを尊敬し、コミュニティの中で自分の意見を主張できるようになった証です。

コロナの影響で協力隊時代に中止となってしまった訓練を最後まで行うことが出来たことをとても嬉しく思っています。今回の活動をきっかけに、訓練を受けた女性達がリーダーとなり、また新たな女性達に訓練と活動の機会を与えられる、良い連鎖が生まれるように、私も関わり過ぎず、見放し過ぎず、これからの活動を見守っていきたいと思います。

3(申請時に)期待された効果と実際の相違点

【当初期待していた成果】

- ①ネパール人講師のリーダーシップが形成される。
- ②受講生の学ぼうとする気持ちが形成される。

【実際の成果】

- ①ネパール人講師のモチベーションを上げることができなかった
- ②遅刻や無断欠席が多かった

【(当初と実際に差が出た)原因】

- ①生理に関する知識があると思っていたが、なかったこと。
→リサーチ不足(生理に関する教育を受けていることを前提として計画していた)

- た)
②事前のミーティングが不足していた
③事前の説明が不足していた

【解決のために実施した内容】

- ①生理に関する研修を行った
②訓練の内容や進め方の共有を徹底した
③時間の厳守や欠席に関する事前の連絡等の指導を徹底した

【上記対応による結果】

- ①生理に関する知識が深まり、プロジェクトの目的達成への影響を防ぐことができた。
②講師のモチベーションがあがり、訓練の目的を共有することができた
③遅刻や無断欠席が少なくなった

4活動成果の持続発展性

プロジェクト自体は終了しましたが、活動自体は持続しています。他の項目でも記述しましたが、講師であるネパール人がリーダーとしての役割を果たしてくれる人材になってくれた為、私が居なくても活動を続けていける環境が整いました。

訓練を終えた女性達は技術と知識を身につけたことで、自信を得ました。初めは消極的で発言をすることも少なかったですが、自分の意見をみんなの前できちんと伝えられるようになりました。ネパールではまだまだ女性の地位が低く、自分の意見を述べられる機会も少ないです。そんなネパールの女性達が発言する場所を得て、学んだことを発揮できることは彼女達にとってとても大きな躍進となっています。

一緒に学んだ仲間と話し合ったりして、今よりもっと良い製品を作ろうとしている様子を見ると、与えられていることをするよりも、自分自身で考えて動く方が彼女達のモチベーションもあがるようで、現在も積極的に活動に取り組んでくれています。

自身の今後のこのプロジェクトの活用予定は1つの目的に対して、様々な考えを持った人たちが集まる集団をマネジメントすること、特に海外でプロジェクトをマネジメントすることについて、時間の観点、仕事に対する取り組み方、その点について、どのようなアプローチをすればスムーズにマネジメント出来るかを学んだので、それをこれからの日本での社会生活、多文化共生に関わる仕事上、今回の教訓を現職に活かしたいと思います。

5苦労した点、反省点、本活動を通じて得られたこと、学んだこと、教訓等

時間が守れない、挨拶が出来ない、訓練の欠席の連絡が出来ない等、苦労した点は数えきれないほどあります。時間が守れないことについては訓練を取り仕切る立場である講師が時間を守れないという、そもそもの問題がありました。8時から始まる訓練に必ず遅れて来ました。時間に間に合うように来るように何度も促しましたが、「ネパール時間」があると言って、なかなか聞き入れてもらえませんでした。

逆に受講生は全員ではありませんが、10分前には到着していました。彼女達の学ぶ意欲を感じることができ、その点はとても嬉しく思っています。挨拶に関しては、10人の受講生のうち挨拶が出来たのは初めのうちは2人だけでした。訓練が進んでいくうちに少しずつ挨拶が出来るようになっていきました。

ネパールの人たちはかなり内気で保守的な面があり、なかなか新しいことを受け入れることが出来ません。特に私が外国人ということもあり、普段よりは内向的になっていったと思います。欠席の連絡が出来ないことについては、連絡なしに欠席した生徒にはこちらから連絡をし、なぜ欠席したのか、欠席した理由と今後、欠席する際には連絡をして欲しいということを繰り返し伝えました。改善がみられず苦労しましたが、なぜ欠席したのか尋ね続けることで、徐々に連絡が出来るようになりました。

本活動を通して様々なことを学びました。文化の違いからそもそもの「仕事」のやり方の違い、当然のように考え方の違い、大きく言うと「生き方」の違いを痛感しました。こ

ちらが良かれと思ってやっていることも、ネパールの人にとっては必要ではなかったり、求めているものが違ったりする中で、同じ目標を設定し、そこに向かって活動していくことが本活動の一番の苦労点でした。これは協力隊員として活動していた時も同じで、「需要」と「供給」の違いの中で、どのようにお互いのそれぞれの目標を擦り合わせていくか、「国際協力」「ボランティア」というのはどうあるべきかを十分に学ぶ活動となりました。

6ご自身の今後のプラン、及び本活動の活用予定・計画

日本へ帰国し、「多文化共生」「異文化交流」「国際開発」分野の職に就きたいと考えています。本活動を通して、「マネジメント」について深く考える機会をたくさんもらいました。「物品」を調達するのは資金で行える、ただ、「人材」を調達し、考えを共有するのは思っていた上に容易ではないことを知りました。思っていることや考えを伝えるのも、言葉も習慣も何もかも違う中での状況ではとても困難でトラブルになることも多々ありました。そんな中で相手が分かり易い様に伝えることの重要性和、言葉の壁を実感しました。

自分で組み立てた計画通りに物事が進まないことを今回のプロジェクトで学んだので、現在海外で日本語教育に取り組む中で、計画の内容をお互いにきちんと理解し合うように話し合いの時間を十分に持つようにしています。そうすると言葉の壁による誤解をなくすることができるのと同時に海外で仕事を遂行する上で限りなく予定通りのプランを達成することが出来るようになりました。今後もこのことを活用していきたいです。